

2021年6月27日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「イエスの証しと神の言葉のために」

聖書：ヨハネの黙示録20:1～15

ナチ政権の時代、多くのドイツ・キリスト教会は、普通に礼拝を行っていた。ヒトラー独裁政権が戦争を起こして行く時も、教会は余り批判的な声は挙げなかった。ナチ政権が、ユダヤ人を迫害する時も教会は余り批判的な声は挙げなかった。教会は、経済的豊かさの中で、政治に対する批判が遠のいてしまうという実態があったのである。

当時、一人の神学者がドイツ教会に宛てた手紙がある。「ドイツのキリスト者に対しても、ドイツ国民全体に対しても、以下のことを証しする責務があるのは教会なのです。すなわち、君たちのやっていることは、良くない！君たちは、誤っている！このようなヒトラーと手を切れ！まったくヒトラーの戦争に過ぎないこの戦争から手を引け！まだ間に合う間に立ち返れ！…なぜ、世界教会運動の代表者と組織とは、この数年、またさらに致命的な展開のあった昨年の夏＜戦争直前＞と秋に、あたかもイエス・キリストから預言者としての職責を委ねられていないかのように、あたかも教会の見張り人としての勤めがないかのように、押し黙り、外交的手腕を表さなかったのか」云々と続く。教会は、その教会としての職責を見失っていたことを問われる。もちろん、少数ではあるが時の政権に立ち向かう教会、キリスト者は居たわけだが…。

黙示録の「殉教」は、ただ単に「踏みえ」的なものとして考えるのではなく、教会が「イエスの証しと神の言葉のために」あり続けたことが記されている。教会が「イエスの証しと神の言葉のために」あるとは、イエスが語られた「愛すること」「平和をつくりだすこと」「正義を行うこと」、そういうことを教会は、イエスから委ねられている。教会がイエス・キリストを現して行くということが職責としてある。聖書の時代の教会が、そのような教会のあり方に立っていたからこそ、今、私たちはキリスト教会に与かることが出来ているわけだ。そして教会は、今もなお問われている。「イエスの証しと神の言葉のために」教会は立っているのかと。

6月最後の礼拝、沖縄戦から76年、戦争を体験された方々の多くが、召されて行く時代の中で、ますます戦争の悲惨さを語り継ぐということは、重要であり、まことの平和に繋がる大切な働きと思う。私たちに出来る主の働きを担っていきたい。(神谷)